

## 和歌山ゴールデンキッズ トライアル

平成23年10月22日(土)  
和歌山県立体育館

主催 和歌山県ゴールデンキッズプロジェクト実行委員会  
協力 (社)和歌山県体育協会  
(公財)日本オリンピック委員会(JOC)  
国立科学スポーツセンター(JISS)

## 目的と経過

- 本事業はボートを含め、将来、五輪など世界で活躍できる人材の発掘・育成が目的
  - 県内全域から小学生を募り、4年生から3年間、継続的に行われるプログラムの最終段階
1. 14種目の審査種目を選手はすべて順番に行う
  2. 和歌山県ボート協会担当者と中央競技団体の関係者としてそれぞれの種目を3段階(1~3)で審査
  3. それらを総合的に判定した総合判定を3段階で評価
  4. 和歌山県教育委員会へ報告
  5. その後、県担当者は選手個別と面談し、各競技の審査結果のうち、適正が高いと判定された種目を紹介
  6. 選手は中学校進学時まで競技を選択する

## 当日の実施種目

- ① 30mダッシュ
- ② 5m×3往復ダッシュ
- ③ 垂直跳び
- ④ ザ・宝とり
- ⑤ 手押し相撲orバウンドボールキャッチ
- ⑥ エアロビクス
- ⑦ 自己表現:医者、美容師、ラーメン屋を20秒間演じる
- ⑧ コーディネーション力
- ⑨ メディシンボール投げ
- ⑩ バランスボードor 捕捉(尻尾)とりゲーム
- ⑪ 鬼ごっこ
- ⑫ 1000m走



## 当日の審査種目

### 【9月の事前審議で決定していた種目】

- ⑥ エアロビクス :リズム感
- ⑨ メディシンボール投げ:体幹の使い方、強さ
- ⑫ 1000m走 :持久力
- ※ ぶら下がり ← 今回は実施されなかった

### 【当日 追加した種目】

- ③ 垂直跳び :下半身のばね
- ⑩ バランスボード :体のバランス

## 審査方法と結果

- なるべく多くの選手に声をかけてもらうよう、部分的にでも優れた能力があれば選考の対象とする
- 2人が別々に各種目を審査し、結果を総合する。二人の平均が2.5以上の選手を対象とする



- 総合評価3とした選手14名、1と評価した選手0名

## 審査のむずかしさ

- A一部に秀でた能力を持つ選手が苦手種目に苦戦する選手
- B目を見張るほどではないが、すべての種目で平均以上の結果を示した選手
- A指導者の接し方や指導法によって成果が大きく左右されてしまうのがこの年代の難しさであり、直接の指導者の方針や希望を尊重する方がよいのでは
- Bよい競技成績を残すためには身体能力こそすべて。よい成績をあげ、さらに競技力向上を目指して努力するのがスポーツの楽しさ。それには、身体能力が高い選手に適切な初期指導を与えることが近道。そうしてますますその競技にのめり込んでもらえれば、当初の目的は達成される。



どちらがふさわしいか、難しい。

## 将来性をどう判断するか

- 発達中の身体能力から判断してよいか、現在の身体能力から判断してよいか
- この年齢はバランス感覚が完成しつつある段階で、筋・骨格系、持久力に関しては成人の50%にすぎず、むしろ、身体の使いこなしを短時間で調整できるコーディネーション能力が高い選手の方が将来性を見込めるのか
- こうした選手が中学の間に好成績をあげるのか
- この1、2年で身体の成長と筋力・持久力の向上を見込めるとは言いきれない
- 好成績を残せなければ、競技の楽しさも味わうことなく引退してしまうかもしれない



将来性を伴う審査は、見通しを持つのが難しい。

### 有望選手の早期発掘と育成は長期計画で

- 人材を発掘し、計画的に育成するのであれば、さまざまな蓄積データが必要なのでは？
- ボート界では、低年齢からのトップアスリートの育成例がない。

そこで ↓ 提案

1. ジュニアを含む日本代表選手のなかで特に秀でた能力をもつ選手を対象に、小・中学生時代に遡って定量調査する。
  - ①どのような身体(体格や運動能力)をしていたか
  - ②どのような競技でその秀でた運動能力を磨いたか
  - ③どのような生活環境下で育ってきたか
2. 競技成績などの客観データと連動させ、さらに高校や大学で競技を継続する決心をした選手の主観と併せて残す
3. 今回のようなトライアル基準の目安にする

↓

将来ある選手を「人材発掘」という視点でボートに引き込むには、長期的、計画的、継続的な対応が必要ではないか

